

# マルクス・レーニン主義通信

## 共産主義者同盟結成二〇周年 伝統を継承し、革命党建設の前進を

二十年前(1958年)の十二月十日、共産主義者同盟は生まれた。

わずか數十名の結集をもって結成された共産主義者同盟は、「真実にマルクスの思想を語り、ブルジョア的合法性の枠に制限されずにそれを打破し、議会演説や口先だけの抗議に満足しないで大衆を積極的な行動にひき入れ、あらゆる根本的な民主主義的要求の闘争を拡大し、燃えたたせてブルジョアジーに対するプロレタリアートの直接の突撃に、すなわちブルジョアジーを奪奪する社会主義革命に導く能力を持つ革政党を結成せよ!」(共産主義者同盟結成大会)



写真 全学連2万人国会アモ 学生の先頭  
海内集会をかどりと南港門から突入

議案「プロ通」との宣言を発し、日本革命運動の新たな前衛への途へ出発した。

共産主義者同盟は、全学連運動において、「自治会」「サービス機関」論という七中委イズムから八中委九大會の「平和擁護闘争路線」への転換をかちとり、砂川闘争を闘った反戦学園(後に社学同と改称)を指導した学生党员グループを実体としていた。それは、「プロレタリア通信」No.1からNo.6にわたる党内一分派闘争の自然発生性に規定された、いわば敗北の結果として生み出されたのである。

共産党からの組織的分離—共産同結成は、共産党が社会排外主義への変質を開始し、自らの日和見主義を護持するための官僚主義的統制を強めている中において、極めて正当なものであった。又、それがトロツキスト連盟(後に革共同と改称)の影響などを受けつつも、第四インター・革共同への流入を拒否し、新党結成の途を選んだことは、彼らの小ブルジョア的サークル主義との闘争という意味で意義のあるものであった。それは、独自に諸政治闘争を組織し、全学連第一回大会においては「帝国主義打倒」の路線を確立してきた学生党员グループの歴史的成果だったのである。

そうでありながらも、共産主義者同盟による党内一分派闘争は、結集軸があいまいなことにより、諸傾向の存在という当時の共産党内の状況下にあって、極めて狭い影響力しか保持しえなかつた。それは、当初の党内闘争の方針から「プロ通」の組織的分離への突然の転換に示される自然発生性、いわゆる「裏切り史観」という理論的表現として示されており、党内労働者は、港地区委員会など多く一部を除いては獲得することができなかつた。このことは、共産同の分派闘争の成果が、限られたものであつたことを示している。

だが、「世界革命、暴力革命、プロレタリア独裁」の原則を復権し、「プロレタリアートは全世界を獲得しなければならない」という精神で武装された共産主義者同盟は、五九年一一・二七を初めとして、安保闘争を、最もよく最先頭で闘い抜いた。そして、「同志権、君の死に

### 本号の内容

日本軍事体制を明らかにした安保協議 3頁  
大平新政権の階級的性格

4頁

どのようにして「第三期」を清算すべきか

月刊 1部100円  
共産主義者同盟(全国委)  
マルクス・レーニン主義派  
編集発行人 目黒安雄  
横浜港南郵便局 私書箱16号  
振替 横浜3719

## マルクス・レーニン主義通信

あたつてわれわれは誓う。// 君の死に報いるもの、それはありし日の君の革命的意志をうけつき、おそれずに新たな革命的戦闘を組織する以外にない。// 君の死を償うもの、それはプロレタリア世界革命の勝利をめざしわれわれが闘う力を倍化することだけである。// われわれは君の偉大な革命家としての生涯に劣らぬ決意をもつて闘いぬくであろう。// : : : プロレタリア革命の勝利はおびただしい血の上に勝ちとられるものかも知れぬ。われわれは、その日の闘いにそなえて、君の屍をこ

共産主義者同盟は、二度の安保闘争を担い、二度とも四分五裂という結果をもたらした。それは、共産の非プロレタリア的性格によつて必然化された「党的敗北」といわなければならぬ。

このような状態の中で、一方では過去の榮

光を追い求める部分が存在し、他方では多くの清算主義がはびこり、最近では「仮にそれ（共産同の再建）がなしとげられたとしても、その客観的意義は、当時われわれが考えていたほど大きくはなく、微々たるものにすぎない、という見解に到達しました」（红旗派解散声明）というおちぶれた暴力団、暴走族まがいのふざけた徒輩すら発生してきた。これらの態度は、はたして正当なものと言えるであろうか？　——否、否、否！　断じて否である。

を継承し、発展させることに他ならない。  
改めて述べるまでもないことであるが、<sup>ア</sup>共

産主義者同盟が果たした功績は、自然発生性の拝跪をこえることはできなかつたが、自らを労働者人民の闘いの先頭におき、大胆に情勢を切り拓いてきたことである。そして、六〇年の六・一五、六七年の十・八はその頂点に位置するものである。

この共産同の成果を支えてきたものは、第一に、労働者人民の広汎な戦闘的エネルギーを組織し、階級対立の非和解性を訴え、その必然的帰結として、大衆運動の武装を推進してきたことである。このことは、自らを日和見主義と区別するものであった。

第二は、限られたものではあったが、國際主義的任務、國際主義的活動を遂行したヒト

これらの成果は、今日の日本階級闘争の中に蓄積されている。だが、共産主義者同盟はこの成果を血肉化し、組織的力量の拡大と發展につなげることに失敗したのである。

どのような遺産を拒否

共産同の解体、この事實こそ、共産同がブルジョア的性格を有していたことを示している。そして同時に、その克服は、「○○〇」が「欠落していた」などというありきたりの無責任な「総括」ではなく、綱領といわば、戦術といわば、組織といわば、すべてがマルクス

第一次共産同の第三次綱領草案は、単に擁取と分配の不平等をのみ告発し、共産主義をゾレン（当為）として把えていた。第二次共産同の「一九二一年主義に貫かれたものとして確立することであることを明らかにしている。

戦同は、第三次綱領草案の総括を捨象し、「戦略、戦術」へと解消してしまった。そこでは、「帝国主義」「ブルジョアジー」「プロレタリアート」などが観念的、抽象的に扱われ、世界の主觀的解釈と、階級闘争に対する恣意的意味付与がなされた。

た活動を提起し、「戦略」という觀念的ドッグマによる「位置付け」と「階級形成」＝意識化に終始した。「われわれは闘争の保証を『戦略規定』ではなく、諸階級の相互關係のうちに求める」というそれ自身正当な主張を共産同は大衆運動を戦闘的に闘うこととして意識化し、結局は「過程としての戦術」、経済主義、急進民主主義をその本質としていたのである。

を越えるものではなかつた。  
そして組織的には、「組織＝理論と実践の媒介」論に示されるように自らを大衆運動の指導部へと低め、「戦略、戦術」を活動の基準とすることから幾多のドクマをテッヂあげ、組織実践の系統性を無視してきた。この二点

は、常に同盟を分裂の可能性の下に置くことになつたのである。

両者は水と油のように  
第一次、第二次共産同の分解の渦中で、少な  
からぬ部分が革共同主義、革マル主義に屈伏  
したこととが示すように、両者は相互補完的関  
係にあるのである。すなわち、「戦略・戦術」  
の一一致を越える領域になるや、観念的「原理」  
に依拠せざるをえず、観念的に「プロレタリ  
ア性」を自己確認するという小ブルジョア的、  
インテリゲンチャ的組織という意味で、共通  
性を有するのである。この両者を使いわけて  
きたのが中核派であつた。

これらのことは、我々に対して、唯物史観と剩余価値論によつて科学となつた社会主義に貫かれた綱領、現実の階級関係を変革する戦術、中央集権党を保証する規約を組織実践の規準とし、その中で〃労働者階級に依拠する〃といふ内容を検証するということを迫つており、そのことが、ブント主義、革共同主義の往還を止揚し、又、スターリン主義を真

に突破するものとなるであろう。

今や、観念的な「戦略」や「階級形成」などは、ごみ箱の中に捨て去らねばならない。

労働者階級の解放闘争の前進のために、宣伝、

爆動 組織の活動を 広く 深く推し進めなければならぬし、わが同盟はその途を歩みつつある。

期」を清算すべきか』を参考されたし。  
なお、『どのようにして「第三期」を清算すべきか』でも同じであるが、「第一次共產同」「第二次共產同」という呼称は便

宜上のものであつて、それ以上の意味を持たせていない。為念。

産主義者同盟を総括し、成果を汲みとろうとしている組織がいくつか存在する。宣伝、煽動、組織活動を真に全国的、全人民的なものとするためには、すべての共産主義者の団結が必要なことは、マレフス・ソロミン三處の

イロハである。だが、そのためには、より全面的な党派闘争が不可欠である。統合の前に区別をはつきりさせなければならない。

党建設の偉大な事業にその身を投ぜよ！

## マルクス・レーニン主義通信

十一月二七日、第十七回日米安保協議委員会が開かれ、「有事」における自衛隊と米軍の共同行動を確定する「日米防衛協力のための指針」が合意された。

は「抽象的な協力関係」にあつた自衛隊と米軍の関係について、「有事」に戦争を想定し日米帝国主義軍隊の共同行動を定式化したのである。

侵略と他民族の抑圧を本質とする日米安保同盟の軍事的緊密化とその増強は、日米帝国主義の支配の危機と強盗的野望の高まりを反映している。そしてまた、日本帝国主義にあっては、この日米防衛協力体制を一連の軍事大国化策動のテコとして、より一層有立立法攻撃が強まることは火を見るより明らかであろう。

さらに陸、海、空の三作戦での役割分担を示し、自衛隊が防衛面、米軍が反撃中心等と謳っている。指揮、調整機関、情報活動、後方支援活動も相互に明記され、そして、有事の際米軍へ「新たな施設区域を提供」し、「自衛隊の基地及び米軍の施設・区域の共用使用が明らかにされている。

③では、日米の協議、日本が米軍に対して行う便宜供与のあり方について研究を行う——等々を明記している。

「指針」をテコに早急に押し進もうとしているのである。

第二に明らかとなつたのは、この「指針」が、明確に極東——朝鮮・アジア——を射程にした日帝の侵略を公然化したことである。このことは、園田外相が「日米安保条約」の安全保障上新たな時期を画すと賛美しているように、日米防衛協力に「極東条項」を導入する上で、「タブー」であった極東の軍事行動を日本の「平和・安全」と直結させたことである。そして、この間の政府の見解でも明らかである。日本は、朝鮮の有事を第一に想定している。これはこの間の侵略戦争を想定していたことを考へれば、朝鮮・アジア侵略戦争への準備を開拓せねばならぬ。

ア ジ ア・ア フ リ カを め ぐ る(再)  
分割戦は、帝国主義間の軍事増強  
軍拡競争を激化し、帝国主義列強  
間の「平和的」同盟の軍事的、強  
盗的性格を前面に押し出してきて  
いる。  
日本帝国主義もこのような中に  
あって、日米安保の緊密化を伴な  
いながら独自の軍事増強を、ソ連  
社帝の軍事力増強や朝鮮の有事を  
「理由」に押し進めてきたのであ  
る。それはアメリカ帝国主義との  
協調を謳いながらも、独自に「韓  
国、アジアの経済権益を保持し、  
より一層の収奪を獲得せんがため  
である。  
十一月二七日より三十日にかけ  
て行われた日米合同演習「コード  
ノース作戦」は、「指針」の具体  
化の第一弾であった。

「指針」は、①侵略を未然に防

止するための態勢 ②日本に対する武力攻撃に際しての対処行動等 ③日本以外の極東における事態で 日米の安全に重要な影響を与える場合の日米間の協力——の三項目を想定し、各々について自衛隊と米軍の行動・役割を明確にしてい る。

（①について）自衛隊は「適切な規模の防衛力を保有」し、米軍は「核抑止力を保持する即応部隊を前方に展開し、来援し得るその他の兵力を保持」する。自衛隊及び米軍は共同作戦計画についての研究を行う。また、共同演習、共同訓練を行う。「作戦上必要と認められる共通の実施要領」の研究、準備の②は、①武力攻撃の恐れのある場合②武力攻撃を受けた場合、に分け、①の場合は「整合のとれた共同対処行動を確保するため」の「作戦準備」として、情報活動、部隊の行動準備、移動、後方支援などに關し、部隊の「警戒監視」態勢から「戦闘準備」の態勢まで、その区分が決定する。（③の場合は、

日本は限定的かつ小規模な侵略を  
独立で排除、困難な場合には、米  
軍の協力を得て排除することを原  
則とし、「作戦構想」は、「自衛  
隊は主として日本の領域及びその  
周辺海空域において防勢作戦を行  
い、米軍は自衛隊の行う作戦を支  
援」し、「自衛隊の能力の及ばな  
い機能を補完する」ことを定め、

# アジア侵略強める日米帝

# 日米防衛協力体制と日帝の軍事大国化

日米安保協

そして第四に、自衛隊――日本「防衛」、核抑止力――第七艦隊を中心とした米軍の攻勢という分担によって、日本の「防衛」は自衛隊が担当するということを強調しているのである。

これらのことから明らかなことは、「指針」がこの間の有事立法攻撃と完全に一体となつた攻撃であり、日本帝国主義の軍国主義へと他ならない。

法支持を表  
の反動攻撃  
社共は「日  
き込まれ論  
国主義の侵  
帝国主義  
を本質とし  
と他民族抑  
アメリカ帝  
アジア侵略  
日本帝国主  
増強し、日  
強化してい  
ら日米安保

表明した民社と獨占資本の方に加担しており、また日本の米極東戦略への巻「日本帝國」から反対し、日本帝國を美化している。

日本帝国主義は、日米安保やアーリカ帝国主義の圧倒的な軍事力

## 帝国主義の 美化論であ

侵略を不問にする日帝  
あることは明白であろう。

經濟進出を押し進め、今日アジアに最大の經濟権益を保持する帝

労働者階級  
立場攻撃に  
自由資本の

「指針」や有事

主義へと発展してきた。

拔かねばならぬ

ジア侵略戦争を目指す  
協力体制を打倒せよ

加盟国への軍事費の増加を要求  
他方日本帝国主義にも「安保に乗り」論、在日米軍駐留賃の問題等として結果している。

マルクス・レーニン主義通信

十二月七日 ようやく大平新政権が誕生した。

田勝「にもかかわらず、幹事長人事に象徴された『大角』対『福中』の対立で首相指名が一日延期するという事態の中から出発した。それは予備選で明らかとなつた『自由主義

的」傾向と反動的傾向の対立というよりも、次の総裁選を射程にした党運営、大平政権の安定を狙う「大角」に対する「福中」の反乱でしかなかつた。

悪な争いを行うということを自ら暴露したのであり、自民党・支配階級の腐敗した姿を明らかにするものであった。

結果が一、二位大差の場合は本選挙の回避をと述べていた。そして彼は自らの主張を「尊重」して本選挙への出馬を断念したのである。この予備選挙が、自民党の派閥活動、金権選挙を活発化し全国化したことは周知のことである。派閥解消、金権批判を掲げた総裁選は

こうして自民党政治の現実の前に吹き飛んだのであり、予備選挙後、中曾根派が派閥活動を公然と開始したこと、そして、大平派が総裁派閥から幹事長を選出しないという「取り決め」を無視したことは、自民党内の抗争が全面的に復活したこと、支配者どもの分裂が深まっていることを示した。

そしてまた 純粋有志といわれた現職福田の敗北という事態は、なによりも金権・物量選挙を最大の武器とする田中軍団の活躍によつたものであつた。そして「世界の福田」を豪語した福田のハシャギすぎもさることながら、有事立法攻撃、三里塚開港の強行、「成田治安立法」等の強権的反動的支配への解答であった。と同時に「経済の福田」が、深刻化する経済的危機に対しても無力であったこと

しかし、このような福田の経済政策の無為無策は、自民党政権総体の問題であるし、野党の責任もある。資本主義の危機は、かつての財政主導、輸出主導の経済政策で解決す

ることかできない程 生産の過剩をもたらしてお  
り、無制限な生産の拡大と取得の私的性  
格を本質的矛盾とする資本主義の根本的な弊

革が要求されているのだから。

形態の転換期を代表した結果であり、大平政権が「自由主義的」支配を基本政策としたとしても三木と同様、野党を資本家階級の支配の下へなすけ更に反動化へのバネとするであろう。資本家階級の支配が常にこの二側面

を保持し独裁を維持してきたことは周知のことである。それ故、社共のように予備選挙での大平の主張を福田よりましたと賛美することはできない。

れた遺産を大事にすること」と主張し、「国民と一体となって、苦楽を共にする政治が第一と考える。第二は政治が甘い幻想を国民にまきちらすことはつしまなくてはならない」と語った。

「バト派」的ボレスをとり、それを売りぬくに、大平政権に、資本の危機の克服を期待することはできない。自民党政権の枠内では、一方で「角影」の圧力を受け、他方では「バト派」の批判を浴びる大平政権は、労働者階級に「苦」を強いることを自らの任務とする以外に安定を保つことができないであろう。

すでに大平政権下で、私鉄運賃の値上げに続いて消費者米価の値上げやタバコ値上げと公共料金の値上げがささやかれ、また橋本厚生相が医師優遇税制の見直しを表明し、内藤本厚生相は教育勵語の礼賛等々、そして大平も元号法制化攻撃を公然化しており、「清新で強力な大平政権のスタートは、労働者階級の生活を困窮し、「先人」＝福田が敷いた反動的支配への移行を準備しているのである。

を語ってきたし、福田政権下の幹事長時代も「部分連合」をもって野党の協力を取りつけ政局を乗り切ってきた。

この「部分連合」とは、「五五年体制」の崩壊——自民党単独政権の終えん——に伴う

一時的な支配者階級の対応に他ならない。自民党・支配者階級の支配の不安定な状態での「部分連合」とは、三木政権時代がそう

であつたように、自民党に活力を与え反動的な福田政権へと移行した一つの武器であつた。それ故、大平政権が「部分連合」を謳い野党連携を第一に進めていた。

的政局の姿勢に負う以上に、支配者階級の支配の安定、反動的強權的支配への過渡的政權としての役割が大きいのである。

「新政治勢力」の結集を謳い「大福三」体制で出発した。しかし、この党三役を占める「大福三」は、福田政権時の「福大中」体制ほど安定していないことからも不安定で過渡的政権となるであろう。

の短期政権を決定したのは深刻化する経済危機であり、自民党「五五年体制」の崩壊であった。ロッキード疑惑後登場した「自由主義的」政治が、自民党金権政治への批判をやわらげ、もって反動的政治、保守本流福田へ移行したように、大平の「自由主義的」政治が福田の「正面突破」とでもいべき反動的

強権的支配への批判を後退させ、新たなる動き  
だしの暴力的支配を準備する役割を果すこと  
は不可避であろう。

「部分連合」へくみすることは明白である。朝日新聞の十二月八・九日の世論調査によれば自民党支持率が五一%へ上昇している。これは社共の無力さを示しており、沖縄地方選での社共の敗北はそれを証明している。

ある。  
派閥抗争を強め、反動化する自民党政権を打倒せよ！

## マルクス・レーニン主義通信

# どのようにして「第二期」を清算すべきか

## 第一次ブント総括

連載第23回

目

次

### はじめに

第一章 第一期（六一年一六六年）関西ブントの思想形成  
第二章 ルカーチ、グラムシ批判

第三章 第二期（六六年一六九年）関西ブントの実践過程  
(一) 再建統一にむかって

(二) 再建統一第六回大会

### (三) 第二次ブントの隆盛

① 党内の世界革命戦略論争  
② 第七回大会

③ 八回大会から九回大会へ  
(前号まで)

第四章 ブハーリン、ローザ批判  
第五章 第三期（六九年以降）関西ブントの思想的、実践的分解  
(本号)

### ① 八回大会から九回大会へ

六八年十二月下旬に開催された八回大会では、議案は採決されなかつた。そして、残念なことであるが、現在、我々はその議案を手元に有していない。そこで、ここでは、八回大會議案と同様の基調が展開されている『共産主義』十

二号（六八年十二月一日発刊）の論文の検討をもつてかえることにしたい。

第四回中央委員会議案報告は、その任務の第一を「この間の総括をめぐって論争された主要に戦略、価をめぐって、（NATO、安保）統一戦線、党建設等の諸論争の政治組織内容を整理する基本的方法と機軸を設定することによって、第七回大会路線の我々の結集点であつた「侵略と反革命に抗し、国際階級危機を世界革命へ」、「世界同時革命」の基本戦略ストラッゲンをより一層、豊富化、深化し実践的体系的に高めあげることである。//我々はこれを…帝国主義論と過渡期世界論との統一=国際的階級危機論、攻撃型世界革命一世界革命戦略等として指定しなければならぬ。//更にかかる方法と基軸に媒介されることを通して基

いる。

実際、当時の諸論争は、前者に

ついては「①戦後の帝国主義をめぐつて、すでにみたレーニンの『帝国主義戦争を内乱へ』」という革

命戦略を修正するにあたって、六

回大会のもつていたあやまり、特

に後進国階級闘争及び革命をめぐ

って、帝国主義の「侵略、抑圧、

反革命」を、帝国主義下の階級闘

争と、後進諸国の階級闘争の有機

的結合の環としてとらえることを

めぐつて、②帝国主義列強の相

互関係、闘争と協調をめぐる帝国

主義の軍事、政治、経済同盟の評

価をめぐって、（NATO、安保）

③帝国主義諸国との世界編成の構

造的特質、そしてここから規定さ

れる各国の階級闘争の性格の分析。

田原芳より）などのように、多面

的なものであった。

そして八回大会は、これらの諸

論争の整理を主要な任務としたの

である。まず前者に関して見るな

らば、「共産主義」十二号の仏論

文は、「世界革命戦略確定のため

の基礎的構造の解明」を目的とし、

第一章で「革命の客観的条件の分

析とは、現代帝国主義の危機の性

格と形態をまずあきらかにするこ

とである」として、それを「統一

市場の崩壊」に求め、第二章では、

英、米、仏、西独、日本の各帝国

主義を、発展しつつある帝国主義

と没落する帝国主義とのタイプ分

析として特徴づけ、第一章の結論

へと結びついている。第三章では、

帝国主義の包囲によつて「労働者

国家」は「疎外」され、又、スタ

ーリンの路線の誤り（「一国社会

主義路線と二段階戦略」）から「

内的」にも「歪曲」されており、

それは、「革命論」を「戦略論」、

「運動・組織論」、「革命観」=「産主義」によって構成し、「革命

争」の「必然性」を主張している。

そこから「労働者国家内の階級闘

争」の「必然性」を主張している。

これは、かの「八・三論文」の

第二章のベースをひきつぐもので

あり、後の仏の「普遍本質論と史

的戦略基底論」（「世界暴力革命

論」）へと体系化されるものであ

る。そしてそれは、『八・三論文』

の第一章の「攻撃型階級闘争」に

見られる極端な主觀主義に対して、

「受動的」なものになつてゐるが、

その根本は同一なのである。すな

く、「帝国主義」や「労働者國

家」を抽象的、観念的にとり扱い、

命戦略を戦略上のカードルとする

